

情報の海を上手に泳ぐ その2

先月号で「日々おびただしい数の情報が私たちに押し寄せてきています。」と述べました。このことをちょっと実感してみましょう。

情報発信者といえば、真っ先に思い浮かぶのが新聞、テレビ、ラジオです。新聞、テレビ、ラジオは、日々の出来事、いわゆるニュースを次々と報じます。しかし、彼らの情報発信は、ニュースだけにとどまりません。新聞は新聞で幾多の話題を記事という形で私たちに送り付けます。テレビやラジオも、番組の中に、これまた目新しい事柄、聞き捨てならないような事柄を織り交ぜます。

彼らの情報提供は、さらに続きます。新聞は紙面の端々に数々の広告を携え、たくさんの折込みチラシを抱えて、私たちの家を訪れます。テレビ、ラジオも、番組の合い間合い間や番組の途中途中に、大量のCMを流します。新聞広告も折込みチラシもテレビ・ラジオのCMも、言うなれば全て情報です。

街を歩けば各種の看板が、電車に乗れば吊り下がっている車内チラシが、否応なしに目に飛び込んできます。家に帰れば郵便受けにダイレクトメールが。受話器をとれば投資話や光回線のお誘いが。情報は、黙っていても相手の方からやってきます。まさに、情報の大海から次々と押し寄せる大波です。

毎日毎日尽きることなく押し寄せる情報の波。昭和の代まではこうではありませんでした。平成に入っても、一桁年代の頃はこれほどまでの情報過多には至っていませんでした。それが、平成二桁年代に入ると、爆発的に増加し始めます。しかも、そのインパクトは年々強烈さを増してきています。

例えば、健康食品関係。コラーゲン、コンドロイチン、グルコサミン、ヒアルロン酸、ポリフェノール、セサミン……。高校時代の化学の時間でも耳にしなかったような名前が、毎日のように茶の間を飛び交います。これらの成分に関わる食品が次々と紹介され、サプリメントも次から次へと生まれてきています。サプリメントの販売者は、こぞってその効能を紹介します。聞いているとどれもが重要で、摂取を怠るとたいへんなことになってしまいそうに思われてきます。しかし、当然摂り過ぎ偏りすぎには弊害が生じます。でも、彼らはその点には触れません。いわゆる負の部分にはふたをしてしまいます。

子育て情報、教育情報も例外ではありません。少子化時代で親の目や意識が一人の子に注がれる割合が増大している現在、子育てや教育に関する情報に対する親の関心もたいへん高くなってきています。加えて核家族化の一層の進展。以前なら実際の経験に基づく子育ての知恵やコツを教えてくれた年寄りが、今は同居していません。赤ちゃんの泣き声一つとっても、その訴えの意味を察知できる知恵者が、突発性発疹や虫さされに動じることなく適切に対処できる知恵者が、今は近くにいないのです。経験者という頼れる師がいなくなった若い親たちは、不安をかかえながら育児書、教育書を紐解きます。しかし、これらの書はバイブルではありません。書いた人が示す一つの判断、一つの方法に過ぎないのです。その判断や方法は、書いた人には合っていたかも知れませんが、それが全ての人の全ての場合に適合するとは限りません。

そこで大切になってくるのが、今自分のところに押し寄せてきている情報は、自分にとって本当に必要か否かを見極める目です。必要なら取り入れ、不必要なら捨て去ります。いわゆる取捨選択です。

取捨選択の判断をするためには、そのためのものさしが必要です。それが自分の「観」です。こんな育ちをしてほしいという、「願うわが子像」に到達させるための子育て観、こんな人間成長をしてほしいという、「願う人間像」に到達させるための教育観です。

「観」は自分で築きます。自分の有する正しく確かな価値観を基軸として、こうありたいああありたいという自分の思いや願いに正直に応えながら、誰にも共感、共鳴されるような子育て観、人間育成観を形成していきます。誰からも賛同を得られるような子育て観、人間育成観は、子育て情報の荒海をゆとりを持って泳ぐことのできる賢いスイマーを生み出します。